



農政制度の改善を望んだ、 ばんどり騒動の象徴的存在

みやざき
宮崎 忠次郎 (1832~1871)

宮崎忠次郎は、天保3年（1832）、塚越村（現立山町塚越）の中でも裕福な家で生まれる。学者肌の初代忠次郎の影響を受け、博識で進取の気風に富んでいたと言われる。安政5年（1858）4月、マグニチュード7.1（推定値）の地震が起り、立山カルデラの大鳶山・小鳶山が崩れる。うずめられた渓谷から大量の土砂が常願寺川に流れ込み、流域の平野は泥の海となる。以降洪水が頻発するようになり農民たちは復興に尽力するが、苦しい生活が続く。一方、忠次郎は村を出て、江戸・東北・蝦夷地を妻子と共に転々とし、財をなす。

慶応4年（1868）、母の死をきっかけに塚越村に戻る。戊辰戦争が起り、新政府側に立った加賀・富山藩は、旧幕府側の長岡藩に出兵するための各種軍需物資の調達を担い、その負担が重くのしかかる。この年は不作で、農民は年貢を納めた時にはもう食用の米に事欠く有り様だった。

翌明治2年（1869）は冷夏に見舞われる。特に新川郡ではいも病が大発生し、例年の2割から3割程度の収穫の大凶作により、農民はますます困窮する。明治維新の直後の混乱の中、凶作に対する適切な対策をせず、例年通り年貢を取り立てようとする役人の態度に農民は不満を募らせる。同年10月17日、白岩川周辺の農民は水橋へ年貢を納めた帰り、竹内天神堂（現舟橋村）周辺に集まる。居合わせた忠次郎は、「いたずらに騒ぐのは愚かなことで、心をひとつにした行動を取るべき」と人々に説く。同月22日、農民が300名ほど国重（現舟橋村）に集まり、忠次郎を頼って呼び出す。解決策がまとまらず暴動になりそうになったため、忠次郎は「村役人には農民から信頼される者を選ぶこと」等を農民に提案。同月23日、交渉の引受けとなつた忠次郎は村役人に要求したが、取り合ってもらはず、金沢藩庁に訴え出ることを決意する。しかし、夕方、村役人に自分たちの要求が無視されたことを知った農民が、忠次郎の制止を聞かず、白岩川周辺の村役人の屋敷を襲い始める。騒動は続き、同月25日、駆けつけた藩の役人に忠次郎が改めて減免請願と農政制度の改善要求の嘆願書を提出。同月29日に無量寺（現舟橋村）で藩の役人から返答を受ける約束を取り付ける。

来る29日、1500名程の農民が無量寺で藩の役人からの返答を待つが、藩の役人は現れず農民の怒りが頂点に達する。農民の怒りを抑えることができなくなった忠次郎は、一揆の総大将になることを決意し、「罪は自分一人が引き受け、誰一人として役人に引き渡さない」と宣言。農民たちは東に進み、行く先々で地域の農民が加わり、2万5千名に膨れ上がった農民たちは多くの豪農や村役人の家を襲い、新川郡全体は騒乱状態になる。農民はばんどり（蓑）を身にまとい、竹槍等を手に加わったためこの一揆をばんどり騒動と言う。同年11月2日、忠次郎は泊の小沢屋に滞在中、刺客に襲われ、ほおに傷を負う。藩兵の本格的な攻撃で一揆の農民は混乱し、翌日には逃げ出す農民が増え、忠次郎は青木村東狐（現入善町）にて捕らえられる。この後、当時の村役人らが更迭され、新任の役人らの懸命な努力で困窮人救済の策が採られ、次第に村々は落ち着き始める。一方、明治3年（1870）7月、金沢藩庁で本格的に忠次郎の取り調べが始まり、明治4年（1871）10月27日、忠次郎は責任をとらされ斬首となる。39歳だった。忠次郎のおかげで農民たちは助けられたと記念碑を建て、その功績に感謝し続けている。

＜専門員 松井 功一＞



明治2年10月25日、忠次郎が役人に渡した嘆願書の大意
(去巳年新川郡暴挙一件御詮議方留)より 利田小学校蔵)



ばんどりを着用して蜂起する農民
(想像図 無量寺蔵)



ばんどり:蓑のこと
藁で編んだ雨具
(舟橋村役場蔵)